

「んぐ…っ♡♡う…っ♡」

少年は自らの口を肩口に押し付けるようにしたまま、何も叫べなかった。

場内には相も変わらぬ美しい音楽が響きつづけているが、その他はほとんど無音と言っていい。

叫べば間違いなくこの場の全員に聞こえるだろう。けれど——

「んんう…♡う…っ♡♡」

下半身のみならず上半身をもぶるぶると震わせながら、少年はこみあげてくる喘ぎを噛みこらした。こんな声、他人に聞かせられるわけがない。

竿への責め立ては、いっそう烈しさを増す。

「んんう…っ！♡♡ん”ッ♡んんう…っ！！♡♡」

竿を思いきり擦りたてられる気持ちよさに、生理的な涙が伝う。

唇を噛んでいるぶん、鼻でしかできないフーフーという呼吸も荒く、小さな躰を男の膝上でびくつかせながら少年は耐えるしかなかった。

こんなに屈辱的なことが、他にあるだろうか。

「こっちも……すっかり硬くなってるねえ？」

「ん”うッ！♡♡」

片手で凝^じった乳首を^お押し潰されつつ、竿の先端の露をにちゅ、と絡めとられる。
乳首からのむず痒さと竿からの刺激が、みぞおちあたりでかち合った——その
なんとも悩ましい感覚に、首筋^{くびすじ}をさらして痙攣する。

「ふふ……よく声を我慢しているねえ。それでこそ、私の作品に出演する資格があるというものだ」

「んう…ッ♡♡んんう……ッ！♡」

男はなおもわけのわからぬことを言いながら、指先で絡めとった露を塗りひろげ
でもするように、にちゅにちゅと竿をより速く^じ扱ってくる。
こんな男に躰を好き勝手されて達したくなどないが、やはり躰がうまく動かなかつ
た。甘い香りのする男の身体に包まれて、ただただ、竿に与えられる刺激に気が遠のいていく。

「んう…っ♡♡あ…っ♡うう……っ！♡♡」

しかしあまりぼんやりしていると、うっかり声をほとばしらせてしまいそうになる。